

「教会史の編纂について」

岡部一興

今日沢山の教会史が編纂されている。記念誌的な教会史、略史的な教会史、本格的な教会史など様々な教会史が出版されている。どの教会史をみてもその教会の変遷を垣間見ることが出来て読者を楽しませてくれる。2004年4月筆者の属する教会で『横浜指路教会百二十五年史』(2冊本)を発行した。そこで編纂に関わった経験を踏まえて考えるところを述べてみたい。

まず教会史はそもそもどのような視点で書くべきなのか、また何を指すべきなのかを考えてみたい。教会史は一般の歴史叙述とは異なると思われる。教会史は神の民の歴史を叙述するもので救済史を指し示すものでなければならないと考える。教会は十字架と復活を信じる群れである。また教会は罪人の集りであり、同時に罪許された群れでもある。教会史はそのキリストを信じる群れが主から託されたわざをどのように行なって来たかを顧みることにあり、同時にその教会が将来どのような教会を目指すべきかを指し示すことにある。そのような意味で教会史は救済史をめざすものとなる。筆者は教会史の出発点は過去を顧みる時にどのような説教が語られ、どのような信者がどのような形で信仰を守ってきたかに注目し、一人一人の信者の名前を明らかにする作業から入ることが大切と考える。

教会史を編纂する場合、必ずといってよいほど教会の中に編纂委員会が作られて作業に当たっている。記念誌的な教会史を編纂する時には、基本線を決めてから教会の古物的な人から始まって様々な会員にそれぞれの時代の教会の思い出を書いてもらってまとめる形を取る。この場合は、教会員の各層から原稿を依頼するので極めて身近な教会の歩みとそれぞれの時代の思い出が叙述されて信徒の信仰生活が描かれて身近なものとなる。

略史的な教会史をみると、編纂委員はいるが大抵まとめる教会員がいてその人が書きあげている場合が多いようだ。本格的な教会史になると、この作業は何年も掛かることになる。編纂の方法としては、編纂委員が分担して書きあげれば比較的早く作り上げることができる。この場合には、どういう視点で編纂するかを徹底的に議論しないとばらばらな統一性のない教会史に陥る危険がある。また専門の方に執筆を依頼して資料を渡して書いてもらうこともある。この場合には、依頼する側はすっかり専門家に任せるのではなく、自分たちが教会史を書きあげるような気持ちになって依頼しないと真の意味での教会史にならないという欠陥が現れてしまう。

いずれにしても教会史を編纂する場合、基本線をおさえると同時に教会史を作る視点を明らかにして、教会員が納得できるような教会史にしなければ意味がなくなるのである。教会史を編纂する場合、略史的な教会史にせよ本格的な教会史にせよ、教会の役員会がどこまでその教会史に関わっているかによって教会史編纂の基本線や視点が微妙に異なってくるのである。教会史編纂委員会が基本線や視点を出してそれを役員会にかけて承認してもらうわけだが、分担して書くにせよ、一人の人間が叙述するにせよ、教会史編纂委員会の中でどれだけ協議検討できるかにある。と同時に役員会とのやり取りがどれだけできるかによって、その教会史がその教会のものになっていくかが変わってくるのである。

教会史は、教会史編纂委員会での箇所あ

所をどう書くか、委員会の中で執筆者が発表し、批判を受けること、そして役員会にも原稿を出して一人一人が責任を持って読むことがなければならぬと思っている。なぜなら執筆者が編集委員会で発表し批判を受けなければ、真にその教会の教会史にはならないと考えるからである。また教会の執行部的な重要な役割を果している役員が書きあげたものを具体的に読んでこの教会にふさわしい教会史になっているかの検証をすることが大切と思っている。もしそういう作業を飛ばして執筆者の思うままに叙述するならば、それはその執筆者が考える教会史となり、その人の論文になってしまいその教会の教会史にならないことが起こってくるのではないかと思うからである。

(おかべ かずおき 協力研究員)